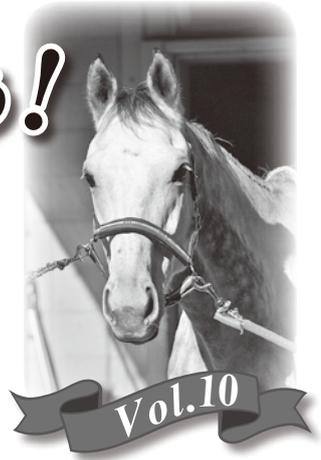


ドレッサージュホースに育てよう!

ドレッサージュホースとしてのトレーニングが進むと、いずれかの段階で大勒バミを装着することになります。北原さんが考える、大勒バミ装着のベストタイミングを教えてください。



Q 大勒始めました! への

◆ いつから大勒をつけるべき?

私は、大勒を装着するのは、基本的なハミ受けとベースの動きが水勒でできるようになってからと決めています。3歳から調教を始めたとすると、早くても6歳ごろと考えるべきでしょう。競走転用馬など、年齢によって調教時期が異なる場合は、基本的なハミ受けとLクラス程度の運動ができるようになってから大勒を装着するべきだと思います。

「この馬は口が強いから、大勒をつけて譲らせてしまおう!」という考えは誤りです。大勒はハミ受けが難しい馬に対し、強く作用させて譲らせるためのものではありません。馬とのコンタクトは水勒で必ず確立させる。それから大勒を装着するべきです。



▲騎手が無意識に大勒を作用させてしまっている状態



▲大勒をほとんど使っていない状態 (通常はこの状態にしておく)

◆ 装着方法の注意点は?

初めて大勒を装着するときは、十分に注意を払わなければなりません。馬にとっては普段よりも大きなハミがもう一つ口の中に増えるのです。特に警戒心を表すような馬に対しては、大勒のグルメットチェーンを外し、ほとんど作用がない状態で馴らすことも必要です。

騎手が大勒を強く引き過ぎてその作用が強くなれば、馬は大勒に対して嫌悪感を覚え、築き上げてきた馬とのコンタクトが悪化する原因になってしまいます。水勒でコンタクトを保てる関係が確立していれば、大勒を装着しても、それを作用させる必要はほとんどないはずですが、騎手はいつでも大勒を緩められる指使いができなければなりません。知らないうちに大勒を強く持ち、強い作用になっていた、などはもってのほかです。大勒をどのくらい強く使っているか、そしてそれが馬にどのような作用しているかを感じ取る感覚を持ち合わせていないなら、大勒を使う資格はありません。

◆ どれくらいの頻度で大勒をつけるべき?

毎日のトレーニングの中で、大勒をどれくらいの頻度で装着するべきかは、馬によると思います。私は、大勒に全く違和感を持たない馬に対しては、ほとんど毎日装着します。違和感を持っている馬については、大勒アレルギーを治すことが先決です。誤った使用法により大勒に対する警戒心を持った馬から、不安を取り除く必要があります。そのためには、水勒に戻したり、また大勒を装着したりを繰り返して、どこに問題があるのかを検証します。まず疑うことは、騎手の手綱の操作が馬にとって快適かどうかです。ほとんどの問題はこれに起因しているので、騎手は自分の拳の使い方を振り返るべきでしょう。馬に原因を探したり馬を否定したりする前に、馬に対する己の扶助操作にどれだけ注意を払えるかによって、この先の大勒に対する馬の考え方も変わるもの、と認識しましょう。

調教が進み、セントジョージ以上のクラスになると、大勒の装着が義務付けられているため、馬が大勒を受け入れていないような状況はあってはなりません。馬がストレスに感じないように扶助操作を行い、最終的に大勒に何の抵抗感も持たない状態を、我々が作りだしてあげる必要があります。

ここまでまとめると、「大勒は装着しているだけで、ほとんど作用させていないじゃないか?」と思われる方が多いと思いますが、基本はその通りです。この考え方に異論を唱えるライダーも存在することは承知しています。しかし、コンタクトのメイン是水勒であり、大勒はあくまでサブ的な使用に留めるという考え方を、私は変えることができません。時には大勒を強く作用させることがあっても、それはきっかけとして使うだけで、継続的に使用しないようにするという考えです。

常にこのような大勒の使い方を心掛けていると、いざ!という時、大勒が必ず我々と馬を助けてくれます。

全日本馬場馬術大会パートI (Lクラス) に出場して

オースミイレブンとともに、外国産馬に交じってLクラスの競技に出場してきました。7月の全日本馬場パートIIの時とは変わり、競技で大勒を装着してみました。この2週間前の競技では、65%を獲得していたので調子はいいほうでした。ただ、駢歩運動でバランスを前へ崩す悪い癖が競技本番で出てしまったので、アップヒル体勢を十分に意識することに重点を置くことにしました。

予選競技のL1課目は、25頭のエントリーがあり、上位15頭が決勝に進出します。オースミイレブンは、本番の速歩区間も良く動き、弾発（インパルジョン）もあり丁寧に経路を回ることができました。しかし、常歩区間に緊張があり、速歩が入ってしまうなど大きく減点を背負ってしまいました。駢歩区間では、心配していたバランスの崩れも最小限に抑えて演技を終えることができました。課題も感じていたので、決勝ではそれを改善して一つでも上に順位を上げようと考えていました。

しかし、結果は59%で18位になり予選落ちでした。何が問題だったかを検証するため、採点した審判員にききに行きました。大きく減点されていたのは、速歩区間でした。私が感じていたインパルジョンは、ただ「緊張を伴った浮いた速歩」と評価され、速歩の動きで大きく減点されていました。前肢の上がり方も左右で癖があり、アンイーブンを取られていました。

私は速歩の躍動感を生み出すために、旺盛な推進力と半減却で馬を踊らせることを常に求めてきましたが、それは緊張と取られ、このクラスで求められているのは派手に見える弾発ではなく、一定のリズムを重視した速歩でした。難しいですね。しかし、海外の若馬の競技で行われている動きは、いずれの馬も適度な緊張感を持ち、踊るように速歩をしている馬が高い評価を得ています。今後はそれら世界レベルの馬と自分が実践している速歩の違いを感じながら、この馬の持つ可能性をどうやって引き出していくかを、また探すことにします！



▲全日本大会 Part I Lクラスに出場